

介護技術教育における歩行介助演習の教育効果の検討

—事例課題を取り入れて—

鈴木圭子¹⁾ 宮堀真澄²⁾

Educational evaluation of practice in assistance for walking as a caring technique Using the case method

Keiko SUZUKI Masumi MIYAHORI

要旨：本文は日本赤十字秋田短期大学介護福祉学科1年次生を対象に行った介護技術歩行介助演習の授業評価である。介護者には基本的技術の原理及び方法を理解した上で、対象に適した介護を実践できる能力が求められている。介護実践のための知識や判断力、問題解決能力を育成したいと考え、介護技術教育において事例課題を取り入れた歩行介助演習を行った。演習後の学生のレポート記述内容より、事例を用いた歩行介助演習による教育効果について検討した結果、個別な対応や、利用者の問題解決を図るための介助を考えることにつながったこと、利用者体験を通して情意面、精神運動面での学習効果があったこと、学生のレディネス及び他科目の履修状況を考慮することによってより教育効果が上がると考えられること等が示唆された。

キーワード：事例課題、歩行介助演習、介護技術教育、授業評価

Summary : This report is the educational evaluation of practice in assistance for walking as a caring technique for the first-year students of the care and welfare department at Japan Red Cross Junior College of Akita. They are required to acquire the abilities of relevant care along with the knowledge of the theory and method. We gave lectures on practice of assistance for walking with the case method to develop the knowledge of care, ability of discernment and problem solving. In the reports of the student's description after the class we could find some significant suggestion that the way was effective to study personal care, problem solving, emotional and spiritual side of client for the students, and we should take students' learning readiness into consideration.

Keywords : Case method, Practice of assistance for walking, The caring technique, Educational evaluation

I. はじめに

介護技術演習は学生が介助者や利用者役などを通して介護の役割や技術を考え、利用者の理解を深める重要な学習である。

社会福祉基礎構造改革では、福祉サービス利用者中心の制度への転換と利用者への自立支援を改革の大きな柱とし、こうした状況を踏まえた介護福祉士の教育課程見直しの中では「介護を必要とする人の生命や人権を尊重し、自立支援の観点から介護できること」¹⁾が期待される介護福祉士像の一つとして示された。介護を必要とする利用者

の生活や障害は多様で、そこで必要とされる技術も一様ではない。そのため介護者には基本的技術の原理及び方法を理解した上で、対象に適した介護を実践できる能力が求められている。

坂本ら²⁾は事例を用いた演習を導入した結果、問題解決能力、自己学習能力育成に効果的な評価が得られたと報告している。介護技術は対人援助であるという認識を持ち、介護実践のための知識や判断力、問題解決能力を育成するための試みとして、今回、介護技術教育において事例課題を取り入れた歩行介助演習を行った。演習後の学生の

介護福祉学科 1) 助手 2) 講師

本文は、第7回介護福祉学会大会において発表したものに加筆したものである。

レポート記述内容より、事例を用いた歩行介助演習による教育効果について検討したので報告する。

II. 研究目的

歩行介助演習後のレポート記述内容より、事例を用いた演習方法の教育効果について検討し、授業評価をする。

III. 研究方法

1. 期間：平成11年5月10日～平成11年6月3日
2. 対象：日本赤十字秋田短期大学介護福祉学科1年次生56名
3. 方法：下記学習指導案に示す事例を用いた歩行介助演習終了後、筆者らが作成した課題（下記1）～5）に対し学生が記述したレポートを分析対象とする。レポート記述内容を抽出し、カテゴリー化し単純集計する。
 - 1) 歩行介助演習を通して学んだこと
 - (1) 歩行時の環境（服装を含む）について

- (2) 補助具の選択・使用方法について
- (3) 観察点
- (4) 杖歩行時の介助について
- (5) 階段の昇降について
- (6) 利用者への声かけについて
- (7) その他

- 2) 自分で実施した介助の評価
 - 良くできた点、うまくできなかった点
- 3) チェックリストは活用できたか
- 4) 感想
 - 利用者役、介護者役、観察者役を通して
- 5) 今後の課題について

学習指導案

- 1) 演習日時：平成11年5月24日10:40～12:10
- 2) 歩行介助演習の位置づけ：介護技術、「社会生活維持拡大の技法」の「社会生活拡大の過程、援助の具体的方法」
- 3) 歩行介助演習の教育目標：表1参照
- 4) 演習方法：表2参照

表1 歩行介助演習の教育目標

一般目標	行動目標
1. 歩行介助の目的と意義が理解できる。	1. 歩行介助の一般的な目的を述べることができる。
2. 高齢者や障害をもつ人が安全に歩行するための介護の基本及び方法が理解できる。	1. 歩行介助の原則と留意点を述べることができる。 2. 利用者が安全に歩行できるための物品の準備、服装、環境を整えることができる。 3. 利用者の障害・歩行状態を観察し、安全に歩行及び階段昇降の介助ができる。 4. 利用者体験を通し、介助が必要な利用者の気持ちについて考えることができる。

表2 歩行介助演習の方法

項目	自力での歩行が不安定な利用者の杖を使用するの歩行及び階段昇降の介助
進め方	(前週) 1. 演習の前の講義で事例、課題を提示する(表2-1)。 2. 各機器(歩行器・杖(ロフトストランド杖、T字杖、4点支持杖、ウォークケイン))の特徴を説明。使用方法をデモンストレーションする。 (演習当日) 1. 演習前課題レポートを学生に返却。 2. 14グループに分かれて課題に従い実習 1) 各グループ内で利用者役、介護者役、観察者役を決めて交替で実習する。 * ベット端座位から開始し、歩行、階段昇降する(1人10分程度) 各グループ毎に教員が観察しながら指導・助言する。 2) 観察者はチェックリストを用いて観察し意見を述べる。 3) まとめ、後始末 4) 演習日の翌日までまとめレポートを提出(表2-2参照)

表2-1 歩行介助演習課題

事例	伊藤要蔵さん(68歳)は、脳卒中で左片麻痺があります。杖にて歩行は可能なのですが、歩行が不安定です。そのため、歩行に対する意欲がみられません。自信を持って歩行できるように指導を含めて介助します。
演習前の事例課題	1) 一般的な歩行介助時の留意点 2) 伊藤さんの歩行介助(階段昇降を含む)をするための①必要物品②介助の手順及び留意事項 3) 伊藤さんに使用する杖のおおよその価格

表2-2 学内演習終了後のまとめ内容

1. 今回の学内演習を通して何を学びましたか。(利用者役、介護者役を通して)	1) 歩行時の環境や服装に関して	2) 補助具(杖)の選択、使用方法に関して	3) 観察点	4) 杖歩行時の介助に関して	5) 階段の昇降に関して	6) 利用者への声かけに関して	7) その他
2. 自分で実施した介助の評価(反省)	良くできたと思う点、うまくできなかった点						
3. チェックリストは活用できたか							
4. 感想	1) 利用者役を通して	2) 介護者役を通して	3) 観察者役を通して				
5. 今後の課題							

5) 関連科目の進行状況：介護概論「介護福祉の概念について」進行中。介護技術「コミュニケーション」終了。「環境」進行中。障害形態別介護技術「運動機能障害者の介護」進行中。

IV. 結果

レポートに学生が記述した内容を抽出、カテゴリー化し、集計したところ以下のとおりであった。

1. 「学んだこと」とした内容について(表3)

1) 歩行時の環境について

「動きやすい服装は疲れない」ことを利用者役を通して6割以上の学生が述べていた。「段差が多い環境は利用者にとって大変」、「少しのものでも障害となるので環境整備は大切」と記述した学生が多かった。その他介護者役を通して「腰紐や介護用ベルトを付けた方が介護しやすい」と記述した学生が多かった。

2) 補助具の選択・使用方法について

利用者役を通して「合っていない杖は苦痛、合っていると楽」と6割以上の学生が記述していた。介護者役を通して「杖の選択、長さの調節の重要性」、補助具の選択、使用には「十分な知識が必要」と記述した学生が多かった。

3) 観察点

杖歩行の介助として「よく観察することが必要」と17件の記述があったが、具体的な観察点についての記述が少なかった。「表情」、「気持ち」、「意欲」

などの記述が少数あった。

4) 杖歩行時の介助について

利用者役を通して、「しっかり支えてもらわないと不安、危険」等の記述が多かった。介護者役を通して、「ペースに合わせた介助が大事」「しっかり支えることが大事」と記述した学生が多かった。

5) 階段の昇降について

利用者役を通して「階段昇降(特に降りるとき)は不安、怖い」と6割以上の学生が記述していた。介護者役を通して「危険、不安なのでしっかりした介助が必要」と記述した学生が最も多く、次に「階段昇降の介助の難しさ」を記述した学生が多かった。

6) 利用者への声かけについて

利用者役を通して「適切な声かけは安心やリラックスにつながる」と半数以上の学生が記述した一方で、介護者役を通して「実際やってみると難しい」、「コミュニケーションは重要だが難しい」等と記述した学生が多かった。

7) その他

その他として記述された内容は利用者役を通して「意欲がない場合、意欲を持ってもらう工夫が必要」、「利用者が安心する介護が必要」という記述があった。介護者役を通して「歩行の目的を見つけられるような介護が必要」という記述がみられた。

2. 自分で実施した介助の評価 (表4)

1) 良くできた点

良くできた点とした点は「利用者への声かけ、コミュニケーション」が最も多く、「利用者のペースに合わせる事」、「挨拶、笑顔」などが多く記述されていた。

2) うまくできなかつた点

「うまくできなかつた点」として記述された内容は「階段昇降の介助 (特に降りるとき)」、「観察」、「利用者への声かけ、コミュニケーション」、「利用者の支え方」等であった。

3. チェックリストの活用 (表5)

チェックリストは「自分の介助の反省として活用できた」、「役立った、少しは役立った」、「ポイントが分かった」など、9割以上の学生が役立ったと評価したが、「リストにとらわれすぎて動きが不十分だった」という記述が1件あった。

4. 感想 (表6)

1) 利用者役を通して

最も多かった記述が「想像以上に大変」であり、

他に「利用者の気持ちが分かった気がする」、「緊張した、怖かった」、「介護者の声かけ、笑顔で安心する」という記述が多かった。

2) 介護者役を通して

「自分の技術、知識の未熟さ」が最も多く述べられ、次いで「相手を気遣う能力が必要」、「コミュニケーションの重要性」、「介護の大変さ、大切さを感じた」という記述が多かった。「マニュアル通りにやらなければという考えが利用者の負担を大きくしてしまった」という記述が1件あった。

3) 観察者役を通して

「客観的に他人の観察ができ、見習うことや新しい発見があった」が圧倒的に多く、他に「他人の事は目に付くが、自分の事は気付かなかつた」等と記述した学生が多かった。

5. 今後の課題について (表7)

「技術の向上」、「コミュニケーション、自然な声かけ」、「個別に応じた介護」、「知識を身に付ける、勉強」などが多く述べられていた。

表3 「学んだこと」としてレポートに記述された内容 (自由記述、複数回答)

項目	カテゴリーと回答件数			
	利用者役を通して (服装に関する事)	介護者役を通して (服装に関する事)		
歩行時の環境 (服装を含む)	動きやすい服装は疲れにくい	36	動きやすい服装がよい	16
	滑りにくく歩きやすい靴が必要	10	腰紐や介護用ベルトを付けた方が介護しやすい	11
	ズボンの裾の長さも大切	8	滑りにくい靴が必要	8
	通気性、吸湿性のある服装がよい	5	介護者の服装も大事	3
	(その他の環境に関する事)		(その他の環境に関する事)	
	段差が多い環境は利用者にとって大変	13	少しのものでも障害となるので環境整備必要	13
	少しものでも障害となるので環境整備は大切	13	環境整備は、介護のしやすさにもつながる	10
	介護用ベルトが要る	3	環境を整えても注意が必要	5
	階段には手すりが必要	2	段差が多い環境は大変	4
	明るい環境は意欲につながる	2	屋外でやることは意欲向上につながる	2
床は滑りにくい材質にするべき	1	階段には手すりが必要	2	
町中では人が多いと大変	1	床は滑りにくい材質にするべき	1	
補助具の選択・使用方法	合っていない杖は苦痛、合っていると楽	35	杖の選択、長さの調節の重要性	29
	長さの調節は大事	5	十分な知識が必要	8
	適切に使用しないと危険	4	説明が大事	4
	健側に筋力必要	4	個別性に合わせた介助必要	3
	説明が大切	3	多脚杖は階段に幅が必要	3
	杖は大切な体の一部	1	補助具を使用してもしっかり介助が必要	3
	多脚杖は階段に幅が必要	1	階段には手すりが必要	1
	杖の持ち運び不便	1	介助用ベルトが必要	1
			介護者の責任の大きさ	1
		利用者が窮屈だと介護者の負担も大きい	1	
観察点	よく観察することが必要	17	呼吸状態	3
	表情	7	周囲の環境	3

観 察 点	気持ち	7	顔色	1
	意欲	7		
	体調	4		
	筋力	4		
	バランス	4		
	歩行状態	4		
杖 歩 行 時 の 介 助	しっかり支えてもらわないと不安、危険	24	ペースに合わせた介助が大事	16
	ペースに合わせた介助が大事	8	しっかり支えることが大事	13
	障害物があると大変	7	実際介助してみると大変、不安	5
	健側の負担の大きさ	4	知識の必要性	4
	介助者の存在は安心	3	個別に応じた介助の必要性	2
	介助者が不安そうだと利用者も不安	2	介助者が不安そうだと利用者も不安	2
	3点歩行は安定することが分かった	2	安全に配慮がいる	1
	釣り上げられるのは不快	1	環境整備大切	1
階 段 の 昇 降	階段昇降（特に降りるとき）は不安、怖い	37	危険、不安なのでしっかりした介助が必要	23
	健側の負担の大きさ	9	階段昇降の介助の難しさ	16
	支え方で安心感が異なる	6	介護者の技術不足は不安を与える	2
	杖が合っていないと困難	4	個別性に応じた介助が必要	2
	杖を使い慣れてないと怖い	3	安全な介護は意欲向上につながる	1
	介護者の位置で不安異なる	2	介護者の責任大きい	1
	利用者のペースに合わせてほしい	2	身長差があると介助が大変	1
	介護者が不安そうだと利用者も不安	1		
利 用 者 へ の 声 か け	適切な声かけは安心やりラックスにつながる	30	実際やってみると難しい	12
	適切な声かけは意欲向上につながる	14	コミュニケーションは重要だが難しい	8
	声かけはコミュニケーションをとる上で重要	4	雰囲気作りのうえで大切	7
	声の大きさ、言葉遣い大切	4	利用者を知る上で重要	6
	名前を呼ばれるとうれしい	2	声の大きさ、言葉遣い大切	4
			介助に夢中で忘れがち	3
			照れがあつてうまくできなかった	2
		状態が分かってないと適切なものとならない	1	
		自分を落ち着かせる効果もある	1	
そ の 他	意欲がない場合、意欲を持ってもらう工夫が必要	5	歩行の目的を見つけられるような介護が必要	4
	利用者が安心する介護が必要	5	実際の利用者によく介護できるか不安	1
	利用者役をやってみてその大変さが分かった	3	利用者信頼される会話がある	1
	利用者の立場に立った声かけの重要性が分かった	3	介護者は筋力が必要	1
	利用者の自主性を大切にすることが必要	3	ボディメカニクスを使わないと腰痛になる	1
	合わない杖は良くないことを実感	2		
	介助者は目線という事が分かった	1		
	分かりやすい説明は難しい	1		
色々な杖を使用してみたい	1			

表4 自分で実施した介助の評価（自由記述、複数回答）

	カテゴリーと回答件数		カテゴリーと回答件数	
良 く で き た 点	利用者への声かけ、コミュニケーション	44	階段昇降の介助（特に降りるとき）	21
	利用者のペースに合わせること	12	観察	12
	挨拶、笑顔	8	利用者への声かけ、コミュニケーション	11
	階段昇降の介助	7	利用者の支え方	10
	利用者の支え方	5	利用者のペースに合わせること	6
	観察	5	全体的にいざ介助する時とまどった	5
	杖の確認	2	杖の確認	4
	利用者の疲労防止	2	方向転換	2
	立位介助	2	環境整備	2
	順序よく介助すること	2	スムーズな介助	1
			目線を合わせる	1
			リラックスした雰囲気	1

表5 チェックリストの活用(自由記述、複数回答)

カテゴリー	回答件数
自分の介助の反省として活用できた	12
役立った、少しは役立った	10
ポイントが分かった	9
介助の順番を確認できた	8
他の人の観察で自分の不足している点分かった	8
不明な点を確認できた	7
観察者としてどこを観察すればいいか分かった	7
レポートの復習として活用できた	1
リストにとらわれすぎて動きが不十分だった	1

表7 今後の課題(自由記述、複数回答)

カテゴリー	回答件数
技術の向上	22
コミュニケーション、自然な声かけ	17
個別に応じた介護	7
知識を身に付ける、勉強	7
気付く能力	6
利用者の理解	6
授業の前の予習	5
観察力を身に付ける	4
利用者に安心を与えるような介護	2
気持ちに余裕を持つこと	2
テキパキとすること	2
体力向上	2
その他	2

表6 感想(自由記述、複数回答)

	カテゴリーと回答件数		カテゴリーと回答件数		
利用者役を通して	想像以上に大変	17	介護者役を通して	自分の技術、知識の未熟さ	17
	利用者の気持ち分かった気がする	16		相手を気遣う能力が必要	13
	緊張した、怖かった	13		コミュニケーションの重要性	8
	介護者の声かけ、笑顔で安心する	12		介護の大変さ、大切さを感じた	7
	利用者にとっては少しのものも障害になる	5		信頼関係、安心感のある介護をしたい	5
	片麻痺になりきれなかった	3		見るのと実際にやるのでは違って難しい	5
	健側の負担の大きさ	3		マニュアル通りにやらなければという考えが	
	杖が合っていないと疲れる	2		利用者の負担を大きくしてしまった	1
	ペースに合わせてくれたので安心	2			
	片麻痺の人がいると思うと胸が痛む	1			
障害者には手を貸してやりたい	1				
観察役を通して	客観的に他人の観察ができ、見習うことや新しい発見があった	38			
	他人の事は目に付くが、自分の事は気付かなかった	8			
	みんな一生懸命介助していた	3			
	声かけ大事	2			
	もっと細かな観察必要	2			
	現場でうまくできるか心配	1			
	利用者の心を和ませるのが鍵	1			
	準備や終了時の確認も大事	1			
自然な介護ができるようになりたい	1				
杖の選択重要	1				

V. 考察

教育目標達成度の評価に関しては技術や知識を確認するための試験等を行わなかったため、技術習得度の正確な評価はできない。しかし学生の主観的ではあるが「学んだこと」とした内容、自己評価、感想としてレポートに記述した内容をもとに全体的な傾向を捉えることにより授業の一評価とした。

1. 教育目標達成状況

各行動目標の達成状況は以下の通りと考えられる。

1) 歩行介助の一般的な目的、原則、留意点を述べることができる。

本文では分析対象としなかったが、演習前の課題レポートでは、介助者は利用者の麻痺側に立つこと、杖の長さの決め方、介助法など原則や留意点について述べていた。

演習後のレポートでは「意欲のない場合、意欲を持ってもらう工夫が必要」「十分な知識が必要」という記述があった。事例課題である利用者「指導を含めて介助」するためには、介護者が十分な知識と技術を持っていることが要求される。本課題を用いたことで、専門的な知識や介護技術

の習得の必要性を痛感したのではないかと思われる。

他にコミュニケーションの大切さ、危険防止のために利用者のペースに合わせて介助すること等を述べていた。これらはいずれも歩行介助時に留意すべき点として教授、及び自己学習したことであり、事前に学習した内容を、演習を通して実体験として確認できたと考えられる。

学生が良くできた点として最も多かった内容は「利用者への声かけ、コミュニケーション」であった。しかしうまくできなかった点としても11件の記述があった。このことは「歩行に対して意欲を持ってない」という設定に対して単なる「声かけ」に終わることなく、対象を動機付けるための情緒面でのアプローチとしてコミュニケーションの重要性を考える機会となったものと考えられる。

2) 利用者が安全に歩行できるための物品の準備、服装、環境整備ができる。

「動きやすい服装は疲れにくい」こと、「少しのものでも障害となる」こと等多くの学生がこの点について記述していた。入学して間もない学生は既習の学習量の不足や人に対して援助するという経験が浅い。演習を通して介護を必要とする利用者の身体的状態を経験し、物品や服装、環境を整えることの必要性を学ぶことができたと思われる。

「合っていない杖は苦痛、合っていると楽」と記述した学生が多かった。これは学生が事例の利用者に使用したいとした多脚杖や長さを調節できる杖の数が不足していたため、他の杖を代用せざるを得なかったことによるものと考えられる。また介助者が補助具についての知識がなければ利用者がそれを活用することは困難であることを述べていた。このことは本事例で学生に使用する杖を選択させたことの効果と考えられる。

3) 利用者の障害・歩行状態を観察し、安全に歩行及び階段昇降の介助ができる。

「よく観察することが必要」と記述した学生は多かったが、観察点に関しての具体的な記述が少なく、この点に関して学びが不足していたと考えられる。教員のデモンストレーション時には、学生は手技を覚えることに集中してしまいがちである。この時点で「観察」の単元にまだ入っておらず、学生は観察の意義について認識が薄かったものと思われる。教員は、他単元の履修状況を考慮

し、学生が認識できるよう解剖生理の理論等について教授することや、何をどのように観るのかより明確に伝えることが必要であると考えられる。

学生がうまくできなかった点として多く述べていた事は他に「階段昇降の介助(特に降りるとき)」「利用者の支え方」であった。「階段昇降時の介助は難しい、混乱してしまった」と記述した学生が多く、このことは学生の技術の未熟な点であるといえる。演習当日に演習前課題レポートを学生に返却し、フィードバックをしたが、この際、学生のレディネスを考慮し技術の再確認をすること、また演習時、学生に個別に指導することが重要となると考えられる。

観察者役を通して6割以上の学生が見習う点や新しい発見があったと述べていた。他者の介助を観察することは、自らを振り返る機会としても有効であったことを示すものと考えられる。

4) 利用者体験を通し、介助が必要な利用者の気持ちについて考えることができる。

利用者役を体験してみて、「想像以上に大変」「利用者の気持ちが分かった気がする」と記述した学生が多かった。歩行介助はその介助が不十分であると転倒など利用者の危険に直結する。利用者体験を通してその危険性や、障害を持つことによって日常生活が不便となることを実感として述べている。

堀口³⁾は「介護技術教育は認知領域の教育だけでなく、精神運動領域(技能)、情意領域(態度・習慣)を含めた教育」と述べている。事例の利用者をイメージした言動をとった体験が、対象の行動を検討する機会となり、利用者理解に重要な学習となったと思われる。

2. 教材及び授業展開に対する評価

橋本⁴⁾は介護技術は対人援助であるとの認識を持たせることが重要であると述べている。授業や教科書などから得た知識をもとに、個々の学生が対象となる利用者像を持ち、必要な介護を考え演習したことは、対人援助としての個別的な対応や、利用者の問題解決を図るための介助を考えることにつながったと思われる。

介護者役を通して自己の技術の未熟さを認識し、今後の課題とした学生が多かった。観察者役には観察した内容を介助者にフィードバックすることを求めたが、新しい発見があったと述べており、

それぞれの役割を体験することによって教育効果があったと考えられる。

チェックリスト使用は役立ったとした人が多かった。リストの内容は単なる手順のみではなく、利用者に対する配慮やその技術に欠かせないポイントを明確にする上で効果があったと考えられる。しかし、「リストにとらわれすぎて動きが不十分だった」と評価した記述が1件あった。学生にチェックリストを示す場合には、その手順方法が全てではないことを説明し、内容の妥当性や使用方法について検討を加えていく必要があると考える。

福祉機器への関心を深めることを意図して、杖の価格を調べることを演習前の課題レポート内で求めたが、実習後のレポートではその点に関する記述はみられなかった。しかし今後、利用者個々に合わせケアマネジメントできるような学習が必要となるため、今回演習前に学生が使用したい補助具の価格を調べたことは、介護の経済的側面を考える機会となったと考える。また学生へのレポート返却と共に、学びの内容を学生にフィードバックした。これらのことは今後の継続学習につながるものと考えられる。

介護を実践していく上で様々な介護技術は必須のものであり、教育の中での習得が期待される。限られた授業時間を有効に活用するためには、学生の学習に対する主体性を育成することが必要である。技術の習得には、繰り返し練習することが求められる。自己学習の必要性を学生が認識し、積極的に学習できるような関わりが必要であると考える。

VI. まとめ

今回、事例を用いた演習方法により学生がどのような介助をするべきか、利用者の問題解決を図るための介助を考えることにつながったこと、利用者体験を通して情意面、精神運動面での学習効果があったこと、学生のレディネス及び他科目の履修状況を考慮することによってより教育効果が上がること等が示唆された。

なお、本研究の限界として、前述のように学生のレポートを分析対象としたため、客観的な評価ではないこと、また1回の演習評価であり、今後の継続評価が必要なこと、さらに演習効果に影響が大きいとされる指導者の指導力の向上について取り上げなかったことが挙げられる。本結果をもとに、演習方法を検討していきたい。

引用文献

- 1) 厚生省：福祉専門職の教育課程等に関する検討会報告書，p6，1999.
- 2) 坂本佑子，横田治美，渡辺久美子，高田みつ子，渡部美智子：基礎看護技術学習における課題を用いた演習導入の評価，看護教育（29），p135，1998.
- 3) 堀口大輔：「介護技術」教授法の一試案，第4回日本介護福祉教育学会抄録集，p72，1998.
- 4) 橋本祥恵，介護福祉士教育の課題，平成8年度全国教員研修会報告集，日本介護福祉士養成施設協会，p42，1996.

参考文献

- 1) 石原多佳子，後藤真澄，佐分行子，村橋美津江：事例で学ぶ介護技術実技評価ブック，p39-41，日総研出版，1998.
- 2) 金子史代，島村澄江，渡邊典子，桑野タイ子：基礎看護技術における体験学習の検討—患者役体験を中心に—，新潟県立看護短期大学紀要，第2巻，p19-26，1997.
- 3) 佐藤治代：基礎看護技術学内演習における教育方法の相違による学習効果—問題解決の方法とデモンストラーション法を実施して—，看護教育（27），p5-7，1996.